ようこそ！夢の本棚へ

発行所：松居直コレクションプロジェクト
代　表：金戸 美紀子
事務局：石川県小松市
小馬出町10-3
空とこども絵本館
☎ 0761-23-0033
bookrin@city.komatsu.lg.jp

【活動方針】①絵本の楽しさを伝える〈親子読書の奨励〉②絵本の歴史を学び、進むべき方向を考える〈絵本文化の研究〉③市が所有する知的財産として、次世代に正しく伝える〈絵本文化の継承〉

「こどものとも」を彩る作家と画家たち②
～子どもがどれほど楽しむか、喜ぶか～

『童話集』の刊行

◆私はどちらかと言いますと、当時の日本の児童文学に対しては否定的だったんです。それでも、『幼児のための童話集』（一九五五年刊）という単行本を第１集、第２集と２冊編集して出しました◆第１集の方は、与田準一先生、第２集の方は佐藤義美先生の監修ということで、かなり思い切った児童文学の創作を載せたわけです。

寺村輝夫さんに原稿依頼

◆その第２集の編集をしております時に、ほとんどそれまで発表してなかった寺村輝夫という方にご依頼したんです。佐藤義美先生のご推薦もありましたし、寺村さんも早大童話会にいらしたんですけど、ちょっと主流とは違う感じだったんですね◆私はお会いして面白そうな発想をされる方だなということで、寺村さんに書いていただいたんですが、ちょうど締め切りの時に、福音館書店まで自分で届けてくださったんです。「あのー、こんな作品でもいいんでしょうかね。読んでみてください」って、ほんとにおずおずと私に渡されたんです◆私はそれを拝見したら、日本の児童文学の中では珍しい感覚で物語が書かれており、子どもたちにとっても入りやすい作品だなあと。何かを子どもに教えるとかそういう意識がなくて、子どもがどれほど楽しむか、喜ぶか、そういうことをとっても考えて書いてらっしゃる作品だということがわかりました。

日本の児童文学の流れ

◆その頃は、〝童心主義〟という童話がとても多かったんです。日本児童文学辞典なんかを引きますと、「人生における子ども期の純真多感な状態を童心と呼ぶ。童心に帰ることを大人の生き方の理想とした作品」とあります。これは「赤い鳥」とか「童話」という有名な雑誌が、だいたいそういう流れで創作が発表されていました◆ですから、大人の郷愁としての童心にこもる閉鎖性、そういうふうな傾向が見えたもんですから、私はあまり賛成ではなかったんですね。そして、現実の子どもから遊離していて、子どもの気持ちを関連的にとらえている。そのために、リアリティがあまり感じられない◆もう一つは、〝生活童話〟といわれているものです。かなり左翼的な人が、子どもたちの生活を生き生きと書いていき、かなりステレオタイプでしたけれど、子どもを楽しませるというよりも子どもに何かを伝える、教えるという作品が多かったです。

児童文学の開拓者

◆そういったことで、日本の主流の児童文学の流れには、どうしても私は納得できないという気持ちがあって、その中で寺村輝夫さんというのは、もっと新しい児童文学の開拓者ではないかと思ってお願いしました。私は寺村さんが持ってこられた原稿を拝見して、まだ十分ではないけれども、ここにたいへん可能性があるんではないかということで、その原稿をいただくことにしました◆佐藤義美先生にお見せして「どうですか」って言ったら、「寺村輝夫くんじゃなきゃ、これ書けないね」と批評をしてくださいましたんで、幼児のための童話集に「ぞうのたまごのたまごやき」というのを採用致しました◆そういうことがあったもんですから、「こどものとも」を編集する時に、まだ若い人で新人でしたけれども、この寺村さんの作品を思い切って絵本に致しました◆寺村さんはその後、『王さまシリーズ』というのをお書きになるわけですけれども、早大童話会の中では、新しい児童文学の世界を開いたパイオニアだというふうに思います。

寺村輝夫作/山中春雄画
4号/１９５６年７月号

寺村輝夫『ぼくは王さまの本』全21巻：理論社刊

（つづく）